

本書は、世界中で、ビジネスの最前線に立ち、試行錯誤を繰り返した末に得られた、「社会の変化を一本の線として考えるための原理原則」をまとめたものです。

PCの時代を終え、今はスマホがデバイスの中心。

今盛り上がっている **Oculus** に代表される VR (仮想現実) も「そういう未来がいつかくる」と予測していた人は少なくありませんでした。

~~~~~

Oculus (オキュラス) は、Facebook 子会社のフェイスブック・テクノロジーズ (Facebook Technologies, LLC) が開発する VR ハードウェアおよびソフトウェア製品ブランド。

~~~~~

た。また、歴史上故郷として保証されている土地を持たなかったユダヤ人は、生活の糧を得るために土地に依存しない金融という業態を発展させました。彼らが発展させた金融技術は、厳しい状況下を生き抜く「必要性」が生み出した副産物であり、そのひきがねとなったのは迫害や差別といった人間の理不尽さです。「知識」は、彼らがその理不尽に対抗するために必要に迫られて身につけた武器でした。

要は、今の日本社会には、イノベーションが起きるだけの「必要性」がないのです。

これまでつながっていなかったノード同士が相互に結びつくことで、情報のハブであった代理人の力が徐々に失われていくというのが、これからの社会システムの変化を見通すうえでの重要な原理原則です。

今は SNS などで共有する情報は、「誰かに見せたい情報」に限られています

価値をどう提供して貨幣を増やすかを考えるよりも、**貨幣から貨幣を生み出す方法を考えたほうが効率的**であることに、一部の賢い人が気づきはじめます。製品をつくって市場で売って貨幣を増やすよりも、製品という物質的存在を介さず**貨幣に貨幣を稼がせる方が、効率がよかった**のです。ここにきて、本来価値を仲介するツールだった貨幣が、価値から分離してひとり歩きを始めます。証券化などのスキームが生み出され、金融商品として販売できるようになると、この流れはさらに加速していきました。

Google の時価総額は約 40 兆円で、これは日本の全 IT 企業の時価総額を合計してもまだ足りないほどの大きな数字です。しかし、その 2013 年度の売上は 5 兆円・利益は 1 兆円ですから、それぞれ Google より大きい数字を持つ会社は日本にもあります。それなのに、なぜ、Google にだけ 40 兆円という高い時価総額がつくのでしょうか。Google は、検索エンジンや Android や YouTube で得られる情報をすべてデータとして蓄積していて、それを Adwords の広告システムでいつでも好きなときに売上、つまり資本に転換する手段を持っています。

資本主義の次にやってくる社会を、ひとまず便宜的に「価値主義」とでも呼んでおくことにしましょう。

大きなリターンを出すためには、適切な時に適切な場所にいることが重要です。人間ひとりの努力によってできることは非常に限られています。努力に頼るよりも、大きな流れに乗る方が、はるかに速く目的地に着くことができます。

自分自身が直感的にうまくいくと自信が持てるようなビジネスは、当然他の人もうまくいくと思えますから、競合も大量に出てきます。結果的に競争過剰になり、利益は削られ、事業にならなくなってしまうでしょう。私も起業して以来 10 以上の新規事業を立ち上げてきましたが、うまくいったものとうまくいかなかったものにはそれぞれある傾向がありました。自分も他人もうまくいくと考えていた事業は失敗し、自分も含め全員が半信半疑である事業は成功したのです。

Be a doer, not a talker 評論家になるな、実践者たれ

~~~~~

doer 【名】 実行する人、行為者 やり手、〔思索家ではなく〕 実行家

~~~~~

佐藤航陽. 未来に先回りする思考法 (Kindle の位置 No.2575-2580). 株式会社ディスカヴァー・トゥエンティワン. Kindle 版.

2015 年 8 月 30 日 電子書籍版 発行